



TITLE:

観測帳

AUTHOR(S):

中村, 要

CITATION:

中村, 要. 観測帳. 天界 1931, 11(123): 348-348

ISSUE DATE:

1931-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161680>

RIGHT:

観 測 帳

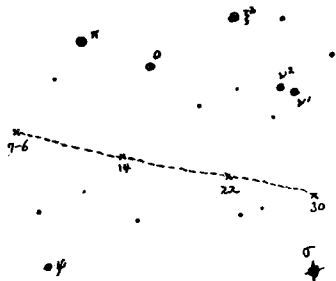
花山天文臺 中 村 要

小遊星アキタニヤ 5月號に推算表を出しておいたが推算とのずれが赤徑で+ 5.5 分赤緯で-10分もあつた。一寸見つからなかつた筈である。小遊星の推算位置は此の程度に狂ふ事は珍らしくない。

小遊星ベスタ 第四號小遊星である Vesta は7月8日近來珍しい明るい衝になる。衝の光度は 6.0 等であるから双眼鏡なれば樂に見えるし、肉眼でも鋭眼の人には見えるだらう。小遊星を肉眼で見得る好期は稀らしい。推算は、1925年分點で

7月6日	19時	11.2分	-22°	42'
14	19	3.3	-23	30
22	18	55.5	-24	15
30	18	49.1	-24	54

星座は射手で南斗の上である。



デビス師の死 反射望遠鏡の帶試験法の完成者として有名であつた Rev. C. D. P. Davies は去る2月5日に死去された。デビス師の持つて居た望遠鏡は僅か 4.3 時のニュートン反射鏡であつた。鏡面研磨の研究を始めたのは1904年の事であつて。研究の結果發表された。

On the testing of paraboloidal mirrors.

M. N. 1909. は鏡面検査法に關する最も完全な文獻として知られて居る。師の夫人は18世紀の後半に鏡面製造で名高かつた John Mudge の兄の末孫であつた。

不景氣な彗星 今年は5月末まで1個も新彗星が発見されず甚だ不景氣であつた。然し1927年に発見されたステアンス彗星は発見後三年以上なるのに未だ17等で時々觀測されて居るし、昨年のバイエル彗星も未だ十五等で大反射鏡で觀測が續けられて居る。

Dusseldorf 天文臺の小遊星觀測 獨逸 Dusseldorf 天文臺は小さな天文臺で僅か186ミリ口徑のメルツ望遠鏡外二三の小器械を有するに過ぎないが小遊星の眼視觀測では最も長い歴史を有する天文臺である。R. Luther 氏が最初に発見した小遊星は(17) Thetis であつて 1852年の事である。其れ以來1890年に(288) Glauke を発見するまで24箇の小遊星を眼視的に発見して居る。小遊星の觀測方法は、リング・マイクロメーターに目耳法といふ最も簡単な方法であるが正確さに於ても糸線觀測に比敵する有力なる觀測を行つて居る。20世紀になつて、W. Luther 氏があとを繼いで毎年約40箇の小遊星の約百個の測微觀測を發表して居る。約80年全く同じ仕事を繼續して居るので天文臺のの仕事としても根氣が冴いので珍らしい。觀測は毎年一回年始に A. N. 誌に發表される。又、第57, 82, 113, 241, 247, 288 の六個の小遊星の軌道及び推算の計算を擔當して居る。